

2018年5月31日 6月2日

素朴実証主義のために

嶋尾 稔

教育・研究のための大学のサーバーに政治的な内容を含むファイルを掲載していることの弁明である。森友問題関係の小文は、確かに政治的な性格を帯びていることは否めない。しかし、私が普段従事している研究活動と全く無縁なものではないと考えている。

一言で言うと素朴実証主義の復権の可能性の検討である。資料の性格の吟味を踏まえて、主題に対して最低限何が言えるかを丁寧に虚心坦懐に考えることを第一義と考える方法論の再評価を意識している。要は、あらかじめの解釈図式や問題意識や理論などより、資料の読みを最優先することの大切さの再認識である。はじめに結論ありきの態度の正反対を目指すものである。最初の目論見は大抵裏切られる。それを受け入れることの重要性である。

歴史認識が解釈であると言う点は勿論その通りである。しかし、それが過去の痕跡、あるいはそれを二次的三次的に加工したものの内容や性格に縛られることは忘れてはならないということだ。自由に好き勝手に解釈が出来るわけではない。

歴史の解釈は、大きく二段階に分かれる。まず、過去の痕跡、或いはその加工物の解釈である。これが歴史のコンポーネントになる。さらにいくつかのコンポーネントの間の関係性についての解釈である。素朴実証主義はとりわけ第一の解釈における慎重さを要求するものである。

問題設定時に一つの解釈図式のみを決め打ちで用意することはない。常に複数の見通しを念頭に置きながら資料に向かう。興味のある問題について資料が何を語っているかを虚心坦懐に把握する。自分に都合の良い片言隻句を探し求めることは最も避けなければならないことだ。場合によっては、用意した見通しがどれも当てはまらないこともある。その時は全面撤退か、問題の立て直しである。

すべての先入主を除くことは勿論難しい。客観的な歴史認識には所詮限界があろうが、主観丸出しの自己表現に意味があるとは思えない。出来る限り事実近づこうとするものでなければ公共の知識として評価に値しない。文学としての評価を言う人もいるが、それほど文学としての素晴らしい歴史を書く事が出来る人はそう多くはないのではないか。歴史学者あるいは社会科学者の文学趣味はしばしば滑稽なものに終わる気がする。

歴史認識を縛るものについて考えが浅いと言われるかもしれない。確かに私は理論や哲学が苦手である。ただ自分なりに次のように考えている。歴史認識を制約するものはいろいろあろうが、大きく四つのレベルを考えられるのではないか。

- 1 自覚されない言語使用や言語表現の制限・規則・管理
- 2 無自覚の、あるいは自覚的な理論負荷性及びイデオロギー
- 3 自覚的な政治思想・党派性・歴史観
- 4 資料の読みの精度、史料批判の意識・力量

第一の制約は、ミッシェル・フーコーとかヘイデン・ホワイトを念頭に置いている。正直、よく理解しているわけではない。ただ、敢えて言うてしまうが、フーコーにしても、ホワイトにしても、西洋精神史の独自の解釈の図式に過ぎないのであろうから、それに操を立てて縛られてしまうのも如何なものかという気がする。これは脱構築とかポスト・コロニアルの議論にも似たようなことを感じる。近代植民地期の力関係の中で作られた解釈図式の自明性を暴くところまでは良いのだが、その後、別の解釈図式（しかもあからさまな党派性）に縛られている気がしてならないのだ。ま、難しい問題なので、与太話はこれくらいにしておく。とりあえず無自覚なことを自覚するよう努力することは良い事だろう。

第二の理論負荷性についても実は私は不案内である。本来科学哲学で無自覚の制約を指したのではないかと思うが、クーン以後、多くの研究者はおそらく自分の乗っかっているパラダイムのなものにはある程度自覚的になっているであろう。また、ここでイデオロギーとはある階層や集団に特有の政治解釈の図式のことであり、ヘゲモニー争いで優位にあるものが社会意識に強い影響を与える、その過程で自覚的に政治宣伝する場合もあれば、無自覚にそれを受け入れてしまう場合もあるという構図を考えている（なお、歴史認識の制約という問題ではないが、虚心坦懐な方法で得られた知識が無自覚の政治的効果としてのイデオロギーとして働くという議論も留意しておく必要がある。次の段落で述べることに係る）。

私にもう少しよく理解できるのは、第三、第四の制約の次元である。E.H.カー的問題とランケの問題である。確かに私は昨今の安倍政権批判の風潮に疑問を感じていた。しかし、森友問題について、私は虚心坦懐に資料を読み、資料の記述に即して理解したつもりである。その結果、安倍政権批判に対する批判の主張に行き着いた。これは公平な主張なのか。私は、そのつもりだが、そうではないのかもしれない。一つのテストは、安倍政権批判の立場の人が私の小文を読んでどれだけ納得してくれるかであろう。はてさて、これ如何にである。

さらに多様な学問の制約については、井上章一編『学問をしばるもの』（思文閣、2017）。

少し話を広げる（非力な私には既に風呂敷は大きすぎるのだが）。批判的な人たちの批判が前世紀的な思考で止まっているのではないかという懸念である。言語論的転回の通俗化というか。我々の精神やら現実やらは言語使用と密接に関わっている以上、言語使用を変えれば現実も変わる。或いはフレーミングの考え方とかも同じである。フレーミングを変えればイメージが変わる。しかし、それは朝三暮四ということだろう。そんなやり口にいつまでも騙されるほどみんな馬鹿なわけでもあるまい。勿論、新たな適切な概念化を否定するわけではない。

即物的、即時的レベルではなく一段上のレベルを操るのが、知識人の役割ということであろうか。以前、大阪都知事の橋下徹氏についてハシズムと名付けてその政治手法を分析する本が出された事がある。そんなことをしても無駄とまでは思わなかったが、有効な批判になっている気はしなかった。政治の論争は、結局具体的な政策論争に尽きるのではないか。